

算数科 学級集団における10までのものの個数の比較（同等・多少）の指導に関する事例

事例	算数科 10までのものの個数の比較（同等・多少）	
学級の児童生徒について	学部等	小学部
	障がい名等	知的障がい、自閉症、ダウン症
	児童の主な実態	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物や半具体物を仕切られた容器に入れたり、線で結んだりしながら一対一の対応ができる。 ・10までの数唱ができる。10までの数を正しく数えたり、数に応じて取り出したりする活動については、理解している児童もいるが、教師と一緒に指で指しながら数えたり取り出したりする等の支援が必要な児童もいる。 ・生活の中で、量の大きさについて「多い」「少ない」と自分なりに区別し、表現することができる児童もいるが、「少ない」と表現することが難しい児童もいる。
行動の見方 ・考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中で10までの数や数量、数字に触れる経験が少ない。 ・朝の運動の時間や学級の出席確認等の決まった場面であれば、正しく数を数えたり取り出したりすることができるが、場面や数が変わると般化することが難しい。 	
支援の実際や変容など	<p>「ボウリングをしよう」～どっちがおおい？～</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 1人ずつ順番にボールを投げ、倒れたピンの本数を声に出して数える。 ② ホワイトボードに倒れたピンの本数を書き、隣にそれに応じた数の半具体物を貼っていく。 ③ ホワイトボードに貼ってある、半具体物同士を線で結び、教員と児童や児童同士の倒れたピンの本数について比べて「多い」「少ない」「同じ」のいずれかで表す。 ④ 対象のものや数を変えたプリントに取り組み、本時の学習の振り返りをする。 <p><児童の変容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・半具体物同士を線で結んでいき、余っているものを丸で囲むようにすることで、視覚的に分かりやすくなり、どの児童も「多い」と正しく表すことができるようになった。また、「○○はおおい、△△はすくない」等の表現の仕方を教師と声に出したり、文字にして視覚的に示したりしながら繰り返し確認することで、自分から「こっち、すくない。」と表すことができるようになってきた。 ・比較の方法が分かってくると、自分なりに工程を省略したり、線の書き方を工夫したりして取り組む様子が見られるようになった。 <p><今後の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「多い」は半具体物やプリント等の平面になっても、正しく表すことができていたが、「少ない」「同じ」については、数や場面が変わると表すことが難しくなる場面もあったため、生活の中で意図的にものの数を数え、比較する場面を設定していくようにする。 	